

手づつ花火をまもりたい

桜木小・1 まつい ゆづる

手づつ花火をもっとたくさんの人にしてほしい。これは、なつ休みにさんかした手づつ花火づくりで、とよ川せい年かいぎしよの人のなしをきいて、ぼくがおもったことだ。

手づつ花火づくりでは、はじめに、せい年かいぎしよのおにいさんから、手づつ花火のれきしや、いま手づつ花火をあげる人がへっているというはなしをきいた。そのはなしの中で、いんしようにのこっていることは、手づつ花火は、四百年まえからあって、おこめややさいがたくさんとれることや、みんなのけんこうをねがって、かみさまにささげるためにしているということだ。そして、このたいせつな手づつ花火をあげる人が、どんどんすくなくなっており、このままでは、手づつ花火をあげられなくなるかもしれないといっていたことだ。

ぼくは、そんなことはいやだなとおもった。手づつ花火をはじめて見たときは、その大きな音と、火花の大きさに、おどろいた。でも、とてもきれいで、むちゅうになって見ていた。手づつ花火をあげている人は、あつくてもうごかず、しっかりともっていて、すごいとおもった。しかし、しんがたコロナウイルスですっと見られなかった手づつ花火。ことしは、四年ぶりに見られて、みんなとてもうれしそうだった。ぼくは、手づつ花火を見て、いっぱいパワーをもらったきがした。

四百年もむかしからずっとつづいている手づつ花火を、ずっとたいせつにつづけていきたいとおもった。そのために、もっともったたくさんの人に手づつ花火をしってもらいたいとおもった。

ぼくは、手づつ花火づくりにさんかして、竹に、なわをまいていくところをやらせてもらった。なわをすきまなくまきつけるには、力いっぱい、なわをひっぱらないといけない。まきおわって手を見ると、赤くなっていて、とてもたいへんだった。

でも、ぼくがしたことは、手づつ花火をつくる、ほんの一ふだ。

手づつ花火は、花火をあげる人が竹をとり、それをにて、あぶらをぬき、かわかし、なわをまいて、竹をじょうぶにする。そして、竹の中に、かやくをつめていく。これだけたくさんのかんをかけて、みんなのしあわせをねがって、つくられているから、手づつ花火を見ると、みんなかんどうするのだとおもう。

みんなのころをあかるくてらす、手づつ花火。いつまでも、見られるように、ともだちにも、手づつ花火について、いっぱいしてほしいとおもった。そして、おまつりにさんかしたり、おじいちゃんやおばあちゃんから、おまつりのことや、とよ川のむかしのことをきいたりしたいとおもった。そうすることで、手づつ花火のことをもっとして、みんなの手づつ花火をたいせつにまもっていきたい。